

# 血管奇形に対する硬化療法について



■説明は  
徳島大学病院  
形成外科・美容外科  
病棟医長

山下 雄太郎  
(やました ゆうたろう)

■お問い合わせ先  
Tel : 088-633-7047  
(形成外科・美容外科外来)

## 患者さんへひとこと

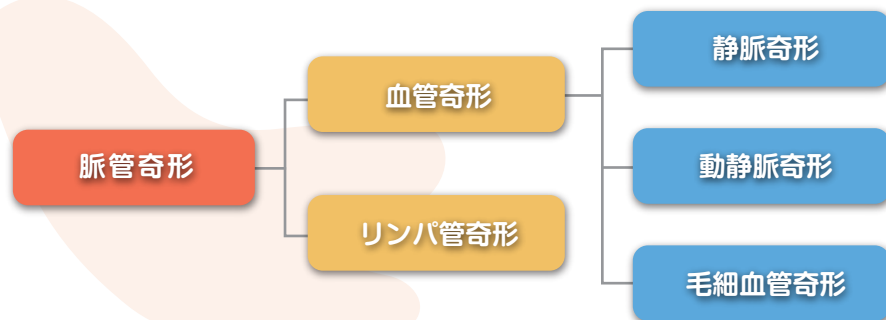
受診して必ず治療しなければいけないというわけではなく、患者さんの意向も聞きながら治療方針を決めますので、身構えずに気軽に受診していただければと思います。

## 血管奇形とは

血管奇形とは、本来無いところに異常な血管が発生するという先天的な病気で、症状としては、血管の奇形による変形や醜形（見た目の異常）、出血、赤や青黒いといった色調の変化が見られます。また痛みがある場合もあります。発生する部位によっては血管奇形により神経が圧迫されることや、気道が圧迫されて呼吸に影響を及ぼすこともあります。体中どこでも発生するので発生する部位によって様々な症状が出ます。先天的

な病気なので出生時に症状が見られる場合もありますが、出生時に症状が見られなくても徐々に血管も拡張するので、成長するにつれて、血管が拡張し皮膚が膨らんで、症状が現れるという場合もあります。思春期、妊娠、出産などホルモンの変化、外傷などを契機に血管奇形が大きくなることもあります。

脈管奇形は血管奇形とリンパ管奇形に分けられ、血管奇形はさらに3つに分けられます。



静脈奇形と動静脈奇形は痛みがあることがあります。静脈奇形では、下垂した時の病変増大時や病変内の静脈石や病変内血栓によっておこる静脈炎による痛みがあります。動静脈奇形は病状が進行すると痛みも出現し、血流が豊富なので重大な出血が起こることもあります。

毛細血管奇形は皮膚の膨らみはほとんど無く、色調の

変化が見られる場合が多いです。

リンパ管奇形は色調の変化はありませんが、変形や醜形、圧迫による症状が見られます。

脈管奇形の治療としてはレーザー治療、塞栓療法、外科的な切除、硬化療法などがあり、症状に合わせて治療を行います。

## 血管奇形に対する硬化療法について

異常な血管の中に、硬化剤と呼ばれる血管をつぶす働きのある薬剤を注入し異常な血管をつぶして小さくする治療法です。硬化剤をいきなり血管に注入するのではなく、先に造影剤を血管に注入し、異常な血管に造影剤が入っていることを確認してから、造影剤を注入した血管と同じ血管に硬化剤を注入します。特に静脈奇形にこの硬化療法は有効です。動静脈奇形に対しては塞栓療法と硬化療法を組み合わせる場合や外科的切除を行う場合もあります。

硬化療法を行うことにより、痛みが改善しやすいというメリットがあります。また、病変が小さくなるので、見た目の改善や血管奇形によって圧迫されて起こっていた症状が改善され、また、出血のリスクも減ります。

一方、硬化剤を注入することで炎症が起こるので、その炎症により発熱や腫れ、痛みが出る場合もありますが、一過性のものですので、1週間程度でこれらの症状もおさまります。また、硬化剤が血管の外に流れ出ると、合併症を引き起こすことがあるので、細心の注意を払って治療を行います。

## 徳島大学病院での取り組みについて

徳島大学病院では平成30年から血管奇形に対する硬化療法を取り入れています。血管奇形は良性の病変なので、体内の深いところにあるものなど治療が困難なため経過観察だった患者さんもいらっしゃいますが、そのような方にとって硬化療法が新たな治療の選択肢となりました。

今までは血管奇形と診断がついていても、治療せず経過をみていた方にも硬化療法という治療があるということ

を知っていただき、血管奇形の症状で悩んでいる方の手助けができたと思います。治療法を適切に選択すればある程度症状の改善が見込める病変が多いので血管奇形で困っている方は相談いただきたいと思います。

困難な症例の場合は形成外科だけでなく様々な診療科が関わって治療を行う必要があるため、今後は診療科間の連携を強めることも重要となります。